

形容詞連用形の用法

高 羽 四 郎

述部に居る形容詞が連用形に置かれると、自然次の文（または用言）に接続するであろう。この場合形容詞は主語名詞との関係の他に、続く部分との関係を生じ、その二つの組合せには種々な位相が認められる。その点を実例から確かめようとするのであるが、便宜上形容詞の含まれる文を甲、次に続く文を乙という符号でまとめることとする。先ず甲乙二文の主語が互に別語である文例から入る。

例題 A 甲乙二文が主語を異にする場合

I 後文乙の述語が形容詞である例

竹青く日赤し雪に墨のくま——素堂（雑談集首・I 文通一一六）

文もなく口上もなし粽五把——嵐雪（炭俵上・VI 夏句三一／句兄弟下・II 追考一〇四）

空清く明星高し今朝の秋——風和坊（桜首途下・二四五）

春ふかく隠者の富貴なつかしや〔付句〕——許六（韻壺下・I 時雨一九）

II 後文の述語が動詞である例

1 状況

羽つかひのあどなう遊ぶ小蝶かな——袖の（一幅半上・V 春句一〇二）

2 理由

月細く時計の響八ッなりて〔付句〕——ユ山（熱田三歌仙・三三）

町せはく階子をかけて踊見ル〔付句〕——其角（句兄弟中・一八二）

軒なかく月こそさへれ五十間〔付句〕——野水（荒野外・IX 初雪二九）

3 場所

墓近く蓮の香を持つツ氷かな——桃隣（枯尾花追・五七）

山深く菫はる音は穠寒し——杜旭（東華集下・七〇）

4 時期

はる近く椿つミかゆる菜畑哉——亀洞（荒野五・II 歳暮四）

明月や夜ふかく立て消器——利合（木曾谷・VI 秋句六）

II 前文甲が成句化を示す例

1 一般形容詞

幅廣く声は落けり郭公——神叔（陸奥千鳥二・VI 夏句七〇）
程近ふ海の鳴る日や焔の雨——春止（桜首途上・二七八）

腹あしく田舎座頭と見えにけり〔付句〕——其角〔萩露・九七〕

寒声のすゑたのもしうかれにけり——賀枝〔一幅半上・Ⅷ冬句七七〕

意地わるふ余所へ吹ゆく蚊やり哉——池蟻〔桜のゆるし二・七八〕

2 よし

親船のしゆひよふ鳴戸漕はなれ〔付句〕——寄鴻〔桜のゆるし一・六〇〕

機嫌能かいこは庭に起かゝり〔付句〕——野坡〔炭俵上・Ⅳ早苗五一〕

こゝろよく人なりになる柳哉——花月〔伊達衣下・六三〕

しともなう千鳥立けり磯馴松——万斯〔一幅半上・Ⅶ冬句六四〕

遠慮なう雲を隣の涼み哉——路通〔小弓・Ⅱ夏部三四四〕

薄曇難なく雪と云当る〔付句〕——桃隣〔陸奥千鳥一・Ⅱ月秋二九〕

いつかたへはかなく醫者の急〔ぐ〕らん〔付句〕——嵐雪〔其袋下・Ⅷ炭頭二七〕

例題最初の「竹青く・日赤し」において、「竹青く」も文として独立しており、意味上「日赤し」と比べて著しい軽重が認められない。およそ対等の二文が接続した形と言ってよいであろう。

続く「文もなく・口上もなし」では「も」が働いているので並列の感じは一層強い。甲乙ともに終止形で言い切った表現に極めて近く、事実

文もなし。口上もなし糠五把〔『俳諧文法概論』六三八頁〕

の本文も存するのであろうか。とにかく文はきれいに独立しており、述部形容詞の働きも減じていない。これら二例は、連用形に移った形容詞がその最も顕著な機能を示す場合であるが、多分前後二文の述部がともに形容詞であり、その表意が互に似ているからであろう。しかしこの平衡も続く文例では崩れ初める。「空清く・明星高し」はなお並立の重文と読むのが穏かであるけれども、仮に「空清く」の方を背景と取れば、にわかには鮮明となるであろう。一度二文が並ぶと、意味の重心はあとの文に懸けるのが普通であって、本項最後の「春深く・隠者の富貴なつかしや」にはそれがはっきりと認められる。「懐かし」の形容詞なのは言うまでもないが、ただ名詞の属性を表わすだけではない、話手の主観をも伝える語である。従ってそれを含む文の主張が強くなるのであろう。（この問題については後に例題CⅡ項で触れる。）一方「春深く」の部分は時節を表わすだけで、文としての力が弱くからであろう。この点は次項で考える。

Ⅱ項では後文乙の述語に動詞が当てられている。それが形容詞であっても、あとの文に重みの移り易いことは今知った通りである。動義の多い語がこれに代れば、その傾向が強まるのも当然であろう。先ずここでは形容詞を含む甲文の独立が最も強く感ぜられるものを拾ったのであるが、それでも甲乙二個の比重には段階

があるので、便宜四組を立てた。1の初例「羽使いの・あどなう」はただ「遊ぶ小蝶」の修飾句に過ぎないとも見える。しかし原句へ戻ってみると、羽使いの印象が鮮明であり、主眼はむしろそこにあるかとも考えられる。「遊ぶ」に動作・状態の両面があり、これを例えば「飛び歩く」ほどの動義に取るか、あるいは「居」るほどの静義に読むかで、文意関係の変る点はこの句の場合にも認められるのではあるまいか。次の例へ移るともうこんな動揺は少い。主意を「時計の響」に置き、「月細く」をその添景として差しつかえないであろう。第2組では動詞を含む部分の重みが更に加わる。「町狭く——はしごを掛けて・踊り見る」で、「町狭く」はもちろん後文の全体に係る理由句なのに、一読「はしごを掛けて」と並ぶだけの従文としか見えない。およそこの辺の文例から主文・従文への分離になってくる。残る二組ではその距離が更に開いている。3組二例「山深く・とろろ掘る音」の「山・深く」は従文などというより修飾語句に近い。最後の「夜深く・立ちて」の「夜・深く」はもう文中の一要素である。辞書の教える通り、「よぶかく」(日仏辞典 *yobukau*; *yobou-*)と濁るのであろうか。いよいよ一個の成語、副詞に類する。

■項では形容詞を含む部分甲の一層従属化して見える文形を求め、その1部には種々の形容詞に関する例を掲げた。最初の二文、「幅広く・声は落ちけり」、「程近う・海の鳴る日」で、「幅・広く」、「程・近う」はそのまま文中の修飾部といつてよいであろう。もちろんそれぞれ二語の成句という意識は残っているが、それは形容詞の側に空間的な実義が表われているからであろう。し

かし名詞の方はその概念がすっかり形容詞のうちに包まれており、「幅・程」は省いても意味にさしたる変動を生じない。二語の成句とはいっても実は殆んど一個の成語である。以下の諸例からはただ関係語句だけを抜き出す。「腹あしく・末頼もしう・意地悪う」では、二語の合成が一層緊密である。名詞・形容詞がともに抽象義になっており、単独には自立しがたいからであろう。あたかも体用両言が補い合って、漸く形義の整った一単位と言っている様である。

2・3部では成語化の著しいものとして、「よし」「なし」が抽象名詞に接続する数多い事例からそれぞれ一小部分をより出した。逐一取り上げる必要はないであろう。名詞の捨象はもとより、形容詞の実質義が極めて薄いのである。二語の結合はそれだけ堅く、類例の多くは一語扱いにするのが便宜であろう。特に「快し」は語原の「心善し」から既に独立していると考えられるが、更に2の末例における「快く」の用法はその形容詞からも遊離して見える。3部末尾の「はかなく」は語源さえ定かには意識されない。これも本来は「はか・なし」であろうか。それにしても名詞の本義は忘れられ、従って「なし」の否定義も感ぜられない。形容詞を作るための語尾の如くである。

A + 形容詞 (甲文) —— B + 用語 (乙文) の文形で、乙の述部用語が形容詞であれば、甲乙二文は釣り合って並立の関係を保っているが、一度後文の述語に動詞が座ると、そこにおのずと重点が落ち、次第に主文・従文への分離が明確となる。一方前文を形

成する名詞＋形容詞が実義を失うにつれて、甲は文の位置を去り、乙文中の修飾部、遂には単一の成語へと転位する。これが例題Aから知られたことである。

次には甲乙二文の主語が同じ名詞である様な文例に移る訳であるが、この場合にはあとの主語が省かれ、「A＋形容詞——用言」の形を取るのが通例である。しかし一度この文形に置かれると、もう主語の欠けた二文とは認められず、述語の重なった単文、「A＋（形容詞＋用言）」として意識されるであろう。続く例題B・Cでは二文が主語を同じくする場合として掲げはするが、事実はかかる意味での単文である点を先ず断っておきたい。

例題B 体言修飾語としての形容詞

I 形容詞＋形容詞

不二白く富士青くして小春哉——朝叟（钱童賦・四三五）
 行としへ親に悲しく子にうれし——竹山（続原・Ⅱ冬句二七）
 面白く物うきものハ砵かな——露荷（続虚栗・Ⅲ秋部一〇一）
 おもしろうてやかてかなしき鶴舟哉——芭蕉（荒野三・Ⅱ仲夏二四／笈日記中・Ⅲ岐阜六）

II 形容詞＋あり（なる）

1 蚊の多くある家も旅のうきね哉——徳茂（新句兄弟・六）
 子を寝せて涼しくも有か片庇——竜風（千鳥掛下・Ⅱ夏句一）

八〇）

涼しい歟寝て髻^{ズメ}剃ル夢心——其角（華摘上・二〇〇）
 赤キ實は甘くやあらん草蔓〔付句〕——嵐雪（陸奥千鳥四）
 ・Ⅰ冬桜三九）

2 名月や桑名は二里も遠くなれ——闇指（句兄弟下・Ⅱ追考五九）
 赤うなりしろなる梅の雫かな——涼菟（皮籠摺上・Ⅶ春句三二）

頓てくすうもあかうも梅の花——荻子（笈日記上・Ⅰ伊賀二九）
 椿の火の丸ふ成たりとかつたり——沙長（荒小田・Ⅱ冬句九四）

去年よりモ鶯の音のわるなりて〔付句〕——紅石（鳥道下・Ⅶ楊貴三）

III 形容詞＋見ゆ（聞ゆ）

1 山門の赤う見えたる山の上〔付句〕——涼菟（皮籠摺上）
 ・Ⅲ干瓜一一）
 白菊の赤ふなる日を名残かな——呂栄（桜首途上・一七）
 一）

2 下駄の音遠う聞ふる夜の雪——楚舟（木曾谷・Ⅲ冬句四二）

IV 形容詞＋一般動詞

寐かゝりて遠く成行砵哉——破笠（続虚栗・Ⅲ秋部九四）
 岬とりも黒う瘦たり蘭田の畦——惟然（初蟬上・Ⅰ春句八五）

我顔の黒くなるまで月ハミン——魚兒（統虚栗・■秋部八
一／熱田三歌仙・一六六）

藍蓼の丸ふ生長（そだち）し利根哉——艶士（腫奥千鳥二・
IV夏句四四）

辻踊一崩して丸ふなる——釣壺（渡鳥屋・I秋句三四）

涼しさや浅ふ流るゝ水の音——まぢ（桜のゆるし五・九六）

うつくしふ濡つゝ雨の芙蓉哉——花汀（桜のゆるし二・九〇）

十六夜月はけにをとなく曇りけり——野坡（統別座敷上・
IV秋句一四三）

日さかりやおとなしく見ゆ山桜——文鱗（統虚栗・I春部
一一二）

切かぶのあぶなう残る藪まはり〔付句〕——空芽（一幅半下
・II冬籠三一）

前後二文の主語が同一であり、あとの文の述語もまた形容詞で
ある様な例を拾ってI項にかかげた。つまり最初の「不二白く—
富士青くして」がここへ設けた様な例であるが、はたしてこの
「ふじ」は同じ一語と言えるであらうか。あたかも別語の如く扱
って、山の二面を対照させようとした作為とも考えられる。特殊
な条件がなければ、同じ主語を繰り返さないのが国語の常であ
り、続く引例「行く年は——親に悲しく・子にうれし」でも、
「行く年」は二つの部分に対して主語となっている。従ってこの
発句は全部で一個の単文とも感ぜられるが、二つの部分それぞれ
れ文に代行するほどの表現力があり、しかも互に反義的なので、

二個の並文とも読みうるのではなからうか。第三例「面白く物う
きもの」はさすがに一文という他なさそうであるが、感情義の形
容詞には他の語より強い主張力があり、ここではその二語が排除
し合っている。ただ単文と言いつるのも何か足りないものが残
る。しかしこの様な文形では単純な一文として聞き流されるのが
自然であり、例えば最後の「竹の子や——涼しく・太く・たくま
しき」を三個の重文などと強弁することはできない。述部が三つ
の形容詞からなる単文であるが、ただこの三語はおよそ同じ力で
釣り合い、また同じ資格で主語と結んでいる事情は、ちょうど終
止形で言い切った三文の並列した場合に相当することに留意した
い。

次には形容詞のあとに動詞の来る広範な用法を探るのである
が、この場合接続する二用言のそれぞれが実義の消長を示し、そ
の結果様々な関係が生じてくる。先ず動詞の方が極度に意味を弱
めた用法に就いて見る。

II項では「有り・成る」を引いた。もとは「生存する・成長す
る」などの意を表わす実動詞であったと考えられるが、多くは抽
象的に用いられ、形容詞に続く用法では更にそれが形式化してい
る。例題は二語を別に1・2と分けて示してあるが、事象は似て
いるのであるべく平行に見て行きたい。それぞれ初文「蚊の多く
・ある屋」、「桑名は二里も遠く・なれ」に於て、文意の大部分は
「かが多い」、「桑名は遠い」に占められ、「あり・なる」は殆ん
ど実義に与っていない。時には動詞の省かれることさえあり、気
付いたその例をそれぞれ第二文及び比較文として上記した。事情

は小異、1の組だけを確めておく。「(子を寝せて)涼しくもあるか」、「涼しいか(寝てつむり刺る)」の二つを比べて、「あり」の有無がどれほど響いていようか。文意はもとより余情さへ似ているのではなからうか。省いても障りないほどに動詞が手薄なのであるから、形容詞が述部の中心に立つのも当然である。動詞と結ぶ形のうち、形容詞の働きの最も著しい用法がここに窺われる。当面の目的としてはこれだけの観察で足りる訳であらうが、動詞の側をも吟味しておきたいので、それぞれ第三例を抜き出す。即ち「赤き実は甘くやあらん」、「ほだの火の円うなったり尖ったり」であるが、この様な文形の「あり・なる」も本来は主語に付く述部動詞であつたと想像される。しかし今日では「実は——在る」、「火は——成る」の様な意識は殆んど残らない。動詞は主語からすつかり切れている。しかし遊離しても単独には立ちがたい語であるから、むしろ形容詞に結び付いて感ぜられる。結果は形容詞が実質概念を、動詞は文中機能を主として荷なう様な結合になっている。この用法の「あり」については先賢の論が分れており、もとより軽卒な批判など入る余地のないことであるが、文中義とその機能から見て、「あり」を動詞、助動詞更には語尾の何れに近いものと認めるかに説が分れうると言つては短見であろうか。「あり」と比べれば、「なる」はまだ実義の残る語であるから、これを動詞とすることに異議は少い様である。しかし実際にただ状態の変化を言い表わすに過ぎず、しかも状態そのものに関する具象義はこれを形容詞に委ねているのであるから、文中での働きは多分に付屬語的である。更に引例では「円うなる」

が「尖る」という動詞に対偶しており、従つてこの成句はこれが一語、「なる」は形容詞を自動詞化するための語尾とも見られるであらう。(なお本項最終例では「悪うなり」が「わるなり」と短音化している点をも参照) もちろん語意識の側に立てば、「なる」を語尾とするのはもとより、助動詞と言うことにも抵抗が感ぜられる。ここにはただ文中での意味職能だけを見ているのであり、また同じ観点から後に「為る」が形容詞を他動詞化するために働く事実を見るであらう。(例題DⅠ項)

追記 形容詞に直接「あり」の続く形は俳諧に稀である。僅かに心付いた「多くある」(Ⅱ項1初例)も享保二十一年(元文元年・一七三六)序の俳書に見えるものであり、用法も今日のものより実義が多い様である。言うまでもなく形容詞に「あり」の付く形は一度古く展開し、その結果生じた「かり活用」は俳諧にも盛んに用いられている。多分そのために「形容詞十あり」が新しく登場しなかつたのであらう。散見する例は上記の通り、「涼しくもあるか・甘くやあらん」など、助詞を介したものである。これもまた古くからの伝習であらう。この形では「く」の部分の音韻変化がありえない筈であるから。

第三項では形容詞に続く動詞が「見える(聞える)」である例から一個だけ借りた。「山門の・赤う・見えたる」、「下駄の音・遠う・聞ゆる」では、動詞がはっきり主語に結び付いており、例えば「山門が——見える」の関係は崩れていない。一方形容詞も主語と繋っており、例えば「足駄の音——遠し」の接続が認めら

れる。多分「見える・聞える」の実義が「あり・なる」などよりは濃く、述部動詞の位置を保ちえているからであろう。しかしその「実義」も動作義よりは状態義に勝る所から、形容詞を引き寄せて、その述格機能を奪うには至らないからであろう。なお煩しいことであるが、この二句の全体を比較すると、「赤く」はむしろ主語「山門」に、「遠う」はかえって動詞「聞ゆ」の方に近寄っている。形容詞の表意が一方は名詞と、一方は全文と関係が深いからであろうが、また「聞ゆ」の動義が「見ゆ」より僅に多いからではなからうか。同じ形容詞が「なる」と結ぶ例をも参考に添えた。なお次項とも比較したい。

最後の項では形容詞が諸種の動詞と結合しながら、なお主語との関係を残していると見られるものを選び出した。形容詞の意味が、形体・色彩等名詞の属性に関連多いものから、性格・感情等文意全体に関係深いものへと配列した。それらが次第に主語から遠ざかり、動詞に近づく跡が認められるかと思ふ。句毎の言及はおき、最後の二句を借りる。「いざよひはげにおとなしく曇りけり」、「切株のあふなう残る」の文中で、「おとなしく・あふなう」は全く副詞の様に聞えるけれども、やはり主語に関する形容詞ではなからうか。そしてこれらが主語と絶縁し切れないのは、動詞の静義であることが影響するかと考えられる。「曇る」は「けり」と結んで「結果の状態義」、「残る」はこの文中で継続義に使われているのである。

以上例題Bでは形容詞連用形の働きをそれに接続する用言の種

類から観察した。述部用言が形容詞あるいは実義の極めて薄い動詞である場合、形容詞も「主語の属性記述」という本来の機能を保っているが、動詞が実義を増してくると、形容詞は次第に主語から遊離する傾向を見せる。しかし例題の様な文形ではまだ副詞として完全に独立はしていない。動詞の動作義に欠ける所があり、恐らくそれも一因と推測されるが、詳しくは分らない。名詞、形容詞、動詞何れの側の僅かな意味の推移も相互に反響して、その効果が適確には捕捉できなかった。次には副詞化の著しく進んで見える用例を形容詞の種類から観察する。

例題C 形容詞が副詞化を示す場合

I 客観義の形容詞

1 空間

川筋の遠くも曲る枯野かな——岩泉（雑談集首・■文通一〇一）

廣く寝て夢はすくなき蚊帳哉——琴山（物見車四・■夏部一四）

2 時間

小はやうもひとり寐つけて宵の梅——卯七（鳥道上・三八九）

とく散て見る人帰せ山桜——一有（其袋上・■春部五八／渡船・■四季三一）

3 比喩

花に風かろくきてふけ酒の泡——嵐雪（いつを昔・一七四）

水仙やあいに時雨のつよう来る——十丈（泊船集六・IV冬句九）
印籠の葉はけしく涌かへり〔付句〕——湖月（句兄弟中・二七二）

Ⅱ 主観義の形容詞

1 価値

ワか貧をやさしく捨ぬつはめ哉——溪石（統原・X春句一八）
珍らしふ脊戸も掃ふよ梅の花——可由（桜のゆるし四・一四四）
よくみれば齊花さく垣ねかな——芭蕉（統虚栗・I春部二五）

ようもよう足か続くそ花盛〔付句〕——空芽（一幅半下IV師走三五）

2 感覚

涼しくも野山にミつる念仏哉——去来（統猿蓑下・V釈教一九）
日の勢やくるしくうこく百合の花——素絵（小文庫・V夏句五三）
水をぬけて蛸子〔かへるこ〕いたく肥にけり——墨薫（伊達衣下・一三〇）

3 感情

手のうへにかなしく消る螢かな——去来（荒野七・V無常五）

おもしろう松笠もえよ薄月夜——土芳（猿蓑三・秋句四〇）
淋しうもちつたる芥子の一重哉——千山（西華集上・九）

動詞との関係が比較的強く感ぜられる用例を見ると、形容詞の種類もまた大体決っているので、仮に上の様な分類を試みた。説明は簡略に済ませる。冒頭の「川筋の遠くも曲がる」で、「遠く」はやはり「川筋」に掛けて読むのが自然であろう。それでも文意は「大らかに（曲がる）」ほどでなからうか。続く「広く寝て」の「広く」は意味上主語には係りにくい文形となっている。この点は2の用法で一層はつきりとし、「こばやう・とく」はもう単純な副詞と見なされる。時間や場所は当然文意の全体に関係する概念だからであろう。殊に「とく」が「疾し」から独立したのは多分古いことであるから、副詞化の極めて進んだ一例である。俳諧では同義の「早く」が多く用いられ、「とく」は意外に少ないのである。やや固化した語だったのであろうか。3の組では転義の形容詞がただ程度を表わすだけに用いられている。可なり具象義の「軽い」が抽象的に、抽象義の「激し」が比喩的に使われていて、しかも文中では動詞の示す動作の強弱を表わしているに過ぎない。いわゆる程度の副詞、殆んど強調の副詞に類する。

Ⅱ項では話手の主情に関連する語を並べた。形容詞は多少とも価値の判断に基づいており、既出の用例でもそれを問題にすべき場合が多かった。要点の一つであるから改めて考えたい。1の初例「わが貧をやさしく捨てぬつばめ」の「やさし」は「つばめ」を形容する語であり、この鳥の性情に可憐な所のあることを述べ

ている。しかし一面主観的な感情義も強い語であるから、文は「つばめを憐れむ」というほどにも聞える。原句を読み返して、「つばめが貧家を厭わず帰ってくるのは——可愛い」と取るのがかえって当る様である。主語を受ける述語としては動詞の方が有力であるから、「つばめは・我が貧を・捨てない」で一応文は完成し、「やさしく」は文の外に置き去られることになる。しかし主観の評価を述べる点でその表意は決して軽いのではないから、既に完成した文意へ改めて大きく結び付く結果が、即ち「文修飾の副詞」であると言ってはまずいのであろうか。続く引用句では「珍らしい」が文頭に来ており、同じ語順はこの種の類例に特に多い様である。詩律や格調もあることだが、やはり全文に係る副詞だからであろう。最後の「よく」が副詞化したのは早い時代のことと考えられる。その後多義に転用せられ、俳諧にも頻出するが、用法は程度の副詞に近づいている。

2・3には感覚・感情を表わすものを掲げた。主情表現の幅は前記評価の形容詞より当然大きく、副詞化の事情も同規であるから、繰り返すことをしない。今日では例えば「旅は——つらい(楽しい)」、「私は——つらい(楽しい)」という様に、同じ語が感情の原因である物についても、その主体である人についても、一様に用いられることがある。しかしこの種の形容詞はもともと客観的な描写として、原因たるべき客体について用いられたのではなからうか。後に形容詞の意味が主観的な要素を多くし、遂にはその主語まで人称が取って変ることになったのではなからうか。これは広範な事象、しかも長い時代に亘る考察の問題であっ

て、当面のこととは直接関連しないのであるが、ただ上記引例中にも今日感ぜられる以上に形容詞が主語に接続している場合がありえようかと反省するのみ。

次にそして最後に連用形の形容詞が対格客語を修飾する用法について一考したい。形容詞が「を客語」を含む構文中に置かれれば、主語に関係する場合と客語に接続する場合とが当然生ずる筈であり、主語を限定する用例は各所で見られた通り随時引用した。客語に係ると考えられるものは取り残しておいたのでそれを一括して分類しただけのこと。ここに特殊な問題がある訳ではなく、ただこれまで通覧した主位述格の用法を側面から補足する所があるかと考えるに過ぎない。

例題D 形容詞が客語を修飾する場合

I 形容詞十為る

巢の中や身を細(う)しておや燕——峰嵐(続猿蓑下・I春句五五)

我か身の細うなりたや牡丹畑——鬼貫(句選・II夏句二六)
 蠅を打つとも生死を軽くせん——幻吁(続虚栗・II夏句一三八)

山雀や見る人の気も軽ふ成り——可遊(桜のゆるし一・三〇〇)

猫の尾をふとしてはいる月夜影(付句)——嵐青(浪化日記・IV巳卯三八)

灯火をくらく幽霊を世に反^カス也〔付句〕——其角〔次韻・I
驚足一三〕

II 形容詞十見る〔聞く・思ふ〕

ふらぬ先うすう昼みし十三夜——潤志〔統別座敷上・IV秋句
二四五〕

月影も藪のはつれに薄う成〔付句〕——呂風〔浪化日記・

■戊寅三三六〕

清く聞^ノ耳に香焼て霍公——芭蕉〔泊船集三・夏句四〕

あたらしう子を思ハ、や花の春——丹野母〔類柑子上・一五
〇〕

苗代や新うなる水のいろ——徹見〔木曾谷・IV春句二八〕

参考 煤のない新家ハ寒ふ思ハれて〔付句〕——菓千〔桃首

途下・二九九〕

III 形容詞十一一般動詞

葱白く洗ひたてたるさむさ哉——芭蕉〔韻塞上・■極月二ノ

泊船集五・冬句六五〕

枝長く伐らぬ習を椿かな——湖春〔炭俵上・V春句四二〕

遠ふ見て草臥の付枯野かな——薄歩〔一幅半上・VI冬句四三〕

名月ハ夕飯早く過しけり〔付句〕——曾良〔枯尾花下・五二〕

うるハしふ小指をはねて茶摘かな——鷺洲〔雜陳二百韻・II
諸句一四二〕

炭賣の末へ行ほと安う賣リ〔付句〕——林紅〔浪化日記・II

風月七五二〕

おもしろふ文もつゝりて物かたり——泉旭〔桜のゆるし五・

四五六〕

うしろにハ涼しふ負て土用東風——枳色〔藤首途上・一七九〕

I項では佐変動詞「す」に接続する形を調べる。初句は「身を細うして親つばめ」であるが、仮にこれを「身を・細う——つばめは・する」の二面に分けて見ると、「身は——細う」の意味関係はなお保たれており、参考に添えた「我が身の細うなりたや」と比較して一層そう感ぜられる。しかし「つばめは——する」の接続が稀薄になっており、「す」単独では主語に殆んど結び付いていない。むしろ「細し」の実義と合して述部を構成しており、従って文は「つばめが・身を・細うす」の様に分析できる形となっている。ここで「細うす」は全く一個の他動詞である。前に「なる」が形容詞を自動詞化するための機能語あるいは語尾と言った点をも合せ考えたい。なお本項の例題に形容詞の短音化した「ふとす」、動詞の省かれた「ひを暗く」の二例をも合せ掲げた。これらの事象もまた「なる」の場合とよく照応する。例題B II項2を参照。

II項で取り出した動詞「見る・聞く」及び「思ふ」等は「す」よりは実義が著しいからであろう、はっきりと主語に接触している。例えば最初の「薄う（昼）見し十三夜（の月）」で、見るの主体が作者であることは言わずとも明瞭なので、人称主語は省いた。「我・月を・見し」で文は完成し、その外に置かれた「薄う」は実質上一層下位へ移っている。従って文中での響きは可なり副詞的なのであるけれども、それでも「月——薄し」の論理関係が

全く切れ去っていない点は、比較例の「月影も——薄うなる」とも読み合せて想像される。ここでまたBⅢ項の「見ゆ・聞ゆ」が対照されるのであるが、あの時の文形はいわば本項の所相形であったとも考えられる。従って本項の形が「る・らる」でそのまま受身に転じた場合、形義甚だ類似することになるであらう。

a 淋しくも人や見るらん刀持——其角（句兄弟中・五）

b うつくしく人にみらるゝ刑哉——長虹（荒野六・雑句五

六）

c 角落てやすくも見ゆる小鹿哉——蕉笠（荒野二・IV暮春

二〇）

a 見る、b 見らる、c 見ゆの三文は何か違いを感じさせるが、それをしかと捕えることができない。a は人の動作、c は物の属性についての表現、動静の差はあるけれども、客観的な記述という点ではかえってこの二つが対応している。それに対し b は物に関する表現であっても、人の動作面が主張されており、多分そのためであらう、「えて人はいばらなどを美しいと思う」といった主観的な評価が表われている。一方形容詞の働きもまた c から a へかけて僅かに動いている。物の形状を表わすべき語が人の動意を主にした表現に置かれているからであらう。

Ⅲ項では一般の他動詞に関する例を形容詞の意味に従って並べた。配列はBⅣ項及びCⅠ項Ⅱ項に準じた。主語＋客語＋動詞の結合は強く、その間に入った形容詞の動揺し易いことは既に認めた通りであるが、ここでその経過はいよいよ顕著である。かくして極度に副詞化したものは、主体述格から転じたものとの区別が

付きにくくなるであらう。例えば

涼しくも海を染たる入日かな——金鳳（華摘下・一五）

こんど古い草稿を書き縮めるに当って、俳諧からの引用句を改めて愛知県立女子大学図書館蔵の原板本と対校することができた。次の諸書は複製本を借用した。

荒小田（竹冷文庫）。皮籠摺・銭竜賦・伊達衣・千鳥掛・華摘（俳書大系）。木曾の谷・小弓（俳書集覽）。初蟬・続別座敷・鳥の道・浪化日記（俳書叢刊）。